

英語の RETROACTIVE 構文について

Retroactive Constructions in English

羽 鳥 百合子

SUMMARY

What we call 'Retroactive Constructions' in this paper include three types of complements taken by a certain class of predicates: derived nominals, gerundive nominals and more clausal type of gerunds following *worth*. Through a survey of the previous researches, the properties of each construction are clarified. In particular we concentrate on the status of empty categories which characterize the constructions. It is claimed that the syntactic differences among the three types are due to the different empty objects contained and that no NP preposing rule should be applied to any of them. This will be a promising approach to an explanatory account of the historical developments and fluctuating status of these constructions.

1. 序

1.1. 生成文法が当初から掲げてきた目標は、いわゆる「プラトンの問題」に対する解答を与えることである。即ち、個人の接する外的な資料は、量的にも質的にも決して豊かとは言えず、しかも一様ではない(刺激の欠乏(poverty of stimulus))にもかかわらず、子供はきわめて豊かでかつ均質な言語知識を獲得してしまうのはなぜかということである。例として Chomsky がしばしば挙げるのは次のような文である¹⁾。

- (1) John is too stubborn to talk to Bill.
- (2) John is too stubborn to talk to.
- (3) John ate an apple.
- (4) John ate.

(2)と(4)は、一見したところどちらも(1)と(3)の目的語が単に省略された文であるように見えるが、(1)-(2)の関係と(3)-(4)の関係は全く異なっている。(4)は(3)の *an apple* に相当する

目的語が省略されることによって、*eat* の目的語は不特定な食物であると解釈されるが、(2) の場合は、*talk to* の目的語は主節の主語 *John* であると解釈され、*John* と *talk to* との関わり方が(1)と(2)では全く異なることになる。(1)の *talk* の主語は *John* であるが、(2)の *talk* の主語は恣意的 (arbitrary) な誰かである。

このような違いは、英語の話者であればだれでも共通に指摘できる事実であるが、この種の知識は、子供が親から教えられたものでもないし、また単純な文からの類推によって獲得するものでもない。なぜなら、ここで各構文間の相違を特徴づけているのは、各構文に含まれていると考えられる音形をもたない要素、即ち空要素 (null element) の性質の違いだからである。例えば、(1)(2)(4)は各々次のような空要素を含んでいると考えられる。

(5) *John_i is too stubborn [PRO_i to talk to Bill]*

(6) *John_i is too stubborn [O_i[PROarb to talk to t_i]]*

(7) *John ate.*

(7)の *eat* の後の空要素は、*eat* の語彙構造には現われるが、統語構造には反映されないと考えられる。(5)の PRO は *John* にコントロールされるが、(6)の PROarb はコントロールされる必要がない。(6)は *talk to* の目的語の位置に変項 (variable) を含み、空演算子 (null operator) O に束縛されると考えられている。

生成文法の多くの研究によって、このような束縛関係は、すべての言語に共通な普遍的な原則に支配されていると主張される。子供が音形をもたない空要素から、このような原則を帰納的に習得するとは到底考えられない。従って生成文法では、子供は高度な仕組みをもった言語知識 (普通文法 UG) を生得的に備えていて、具体的な言語資料に接することによって有限個のパラミターの値が定まり、その範囲で言語間の多様性が生じるという仮説を提示している。UG の性質を明らかにするために、上記のような空要素に関わる様々な原則の研究は、現在の生成文法研究の中心的な課題の一つである。

1.2. 本稿が取り上げる Retroactive 構文²⁾は、英語の文として決して頻繁に出てくるものではない。しかし、前述の UG の研究にとって非常に興味深い問題を含んでいると思われる。それは、この種の構文がいずれも空目的語 (null object) を含み、それが主節の主語と同一であると解釈されるという共通の特徴をもつからである³⁾。

(8) a. *This hypothesis deserves careful investigation.*

b. *This problem bears some thinking about. [C]*

c. *This matter needs handling more carefully. [H]*

d. That problem is not worth trying to solve. [H]

(8a-d)において、補部の *investigation*, *thinking about*, *handling*, *solve* の目的語は、いずれも主節の主語であると解釈される。(a)は補部が派生名詞、(b)-(d)は動名詞構造であるが、順に名詞句性が失われ、動詞句性が濃くなっていると考えられる。(b)は名詞句としての内部構造をもち、一般的には Nominal gerund と呼ばれ、それに対して(c)は動詞句としての内部構造をもち、Verbal gerund と呼ばれるものである。また(d)は、空目的語がより深く埋め込まれた節の中に生起し、束縛関係が非有界的 (unbounded) に成立する。

Hatori(1980)は、このような Retroactive 構文のいくつかの言語事実を指摘した上で、構文間の揺れがあること、主節の主語と空目的語との同一性は、構文ごとに異なった規則で扱われるべきことを主張した。即ち、派生名詞構文の場合には、統語規則とは区別される‘implicit control’というものを仮定し、動名詞構文に対しては、統語的要素 PRO のコントロール、更に *worth* の補部のように動詞句性をより強くもっている構文に対しては、非有界的な規則を提案した⁴⁾。しかし、これらの規則が意味的に共通な現象に関わるということについては、どこかで一般的な形で述べるべきであるということを示唆したにとどまり、具体的な考察は特に行なわなかった。

その後これとは独立に、この構文を扱ったいくつかの興味深い論文が発表され、各構文の特性はかなり明確になりつつあり、いくつかの具体的な分析も提案されている。例えば、Fukuyasu(1984), Hantson(1984), Clark(1985), Safir(1987), Harada(1988)は、GB 理論の枠組みの中での分析であり、主として Fukuyasu は(d)タイプの構文、Hantson は(c)タイプ、Clark は(b)タイプ、Harada は(c)タイプの構文を中心に分析を行なっている。Safir は、一応全タイプの特性の違いを考察した上で、特に(a)タイプの派生名詞を補部とする構文の分析に力を注いでいる。Safir の提案は、Hatori が非常に漠然と触れた‘implicit control’の概念を明確にし、論証したものと考えられる。しかし、これらの論文はいずれも各構文間の共通性について、或は現実にみられる構文間の揺れについては説得性のある解答を与えていない。このような問題意識にたって、Akiyama(1989)や Ohna(1989)は、Retroactive 構文を動的文法理論 (Dynamic model of grammar) の立場から分析している。例えば Akiyama は、*worth* が(a)-(d)の全ての構文を許すという事実を説明するのに、(a)を最も基本の構文と考えた上で、いわゆる *tough* 構文をモデルにした拡張規則を提案し、(b)以下は派生的な構文であるという提案を行なっている。一方 Ohna は動詞 *need* の補部に焦点を当て、受動文をモデルにした(b)タイプから(c)タイプへの拡張規則を提案している。いずれも、名詞構造がこの種の構文の基本であるとみなしている点では共通している。それぞれ、歴史的な事実を踏まえて随所で興味深

い指摘を行なっているが、Akiyama の分析はほぼ *worth* 及びその関連語に限定され、Ohna は *need*(或は要求動詞)に限定されており、より広い意味での Retroactive 構文全体の中での位置づけが必要であろう。

以上の問題意識にたって、本稿では、(a)-(d)の Retroactive 構文全体がもつ基本的な特性、即ち、空目的語を含み多くの場合主語も空であるという点を、もう少し掘り下げて検討する。はじめに、過去の研究によって明らかになった(a)-(d)の各構文の諸特性を比較し、次にその構文にどのような空要素が存在していると考えるのが妥当であるかを、従来の分析を検討しつつ考察する。

2. Retroactive 構文の特性

各構文の特性を見る際に注意すべきことは、ある例文がどのタイプの構文かということは、必ずしも形の上から区別できないことである。ING 形は、純粋な派生名詞とみることも動名詞とみることもできるからである。そこで混乱がないように、(a)構文の例は ING ではない派生名詞に限って挙げることにし、Retroactive Derived Nominal (RD)と呼ぶ。(b)-(d)はすべて ING 形を伴うが、1.2.で述べたように、(b)と(c)の違いは内部構造の違いである。即ち、(b)には *some* や *any* などの限定詞や形容詞が生起するのに対して、(c)は副詞が生起可能な構文である。しかし、(b)の方が広く容認されやすい構文であり、(c)は動詞も限定され、インフォーマントの判断も多様である⁵⁾。従って、(c)は、Ohna が指摘するようにより派生的な構文とみなすこともできよう。本稿では、このような構文間の揺れの現象については最後に少し触れるにとどめる。便宜上(b)(c)は両者を一括して Retroactive Gerund (RG)と呼ぶ。また(d)については、やはり(c)との区別が必ずしも明確ではないが、(8d)にみられるように、動名詞句が完全に節構造をなしていると思われるので、便宜上 Retroactive Clausal Gerund (RC)と呼ぶことにする。

以下 RD, RG, RC について、次の点を比較する。

- A) 補部の主語が属格形で現われるか。
- B) 補部の主語が前置詞句 (*by* 句)として現われるか。
- C) 副詞的要素が属格形で現われるか。
- D) 前置詞残留 (*preposition stranding*)が可能か。
- E) 動詞に隣接しない前置詞句内の空目的語が可能か。
- F) 受動態にならない動詞が生起するか。

英語の RETROACTIVE 構文について

- G) 複数の境界を越えた束縛関係 (long distance construal) が可能か。
 H) 寄生的空所 (parasitic gap) が可能か。
 I) 音形をもたない主語が付加詞 (adjunct) をコントロールするか。
 J) 主節の主語に虚辞の *it* が現われるか。
 はじめに、言語事実を表にして示そう。

| | RD | RG | RC |
|----------------------------|-----|----|----|
| A) genitive subject | O/* | * | O |
| B) <i>by</i> phrase | O | O | * |
| C) genitive adjunct | O | * | * |
| D) preposition stranding | * | O | O |
| E) PP adjunct | * | * | O |
| F) non-passivizable verb | * | * | O |
| G) long distance construal | * | * | O |
| H) parasitic gap | * | * | O |
| I) adjunct support | * | O | O |
| J) expletive <i>it</i> | * | * | O |

A) RD については、属格形の主語を許す場合と、許さない場合とがあり、この点は後で触れる。RG は不可、RC は状況によっては可能である。

- (9) a. The baby needs *the nurse's* attention. [C]
 b. He did not deserve *our* condemnation. [R]
 c. John underwent *the FBI's* investigation. [R]
- (10) a. *The town underwent *the state's* establishment. [R]
 b. *John fully merits *the government's* ostracization. [C]
- (11) a. *These ideas merit *Bill's* working on. [C]
 b. *This matter needs *an expert's* handling carefully. [H]
- (12) a. This problem is worth *Bill's* working on. [C]
 b. San Francisco is worth *your* visiting frequently. [A]

B) 行為者を表わす *by* 句は、RD 及び RG では可能だが、RC では許されない。

- (13) a. This result deserves final acceptance *by the planning committee*. [S]
 b. The town underwent establishment *by the state*. [R]
- (14) a. That point needs stressing *by any linguist*. [H]
 b. That idea doesn't deserve any talking about *by serious scholars*. [S]

- (15) a. *That point is worth stressing *by any linguist*. [H]
 b. *This issue is worth considering *by experts*. [S]
- C) 副詞が属格形で生起できるのは, RD だけである。
- (16) a. This proposal didn't merit/deserve *this mornig's reevaluations*/*reevaluating.
 b. John didn't require/deserve/need *yesterday's reexamination*/*reexamining. [S]
- D) 前置詞残留は, RG が可能であるという点で RD と大きな相違を示す。
- (17) a. *These diplomats deserve some conversation *with*. [C]
 b. *This grant requires reapplication *for*. [S]
- (18) a. These diplomats deserve some conversing *with*. [C]
 b. This grant requires reapplying *for*. [S]
- (19) a. You're suggesting that Simon isn't worth caring *for*.
 b. That problem is worth working *on*.
- E) 動詞に隣接しない前置詞句の中に空目的語が可能なのは, RC だけである。
- (20) a. *They need giving more assistance *to*. [Hr]
 b. *Your country doesn't need sacrificing your life *for*. [H]
- (21) a. This violin is worth playing sonatas *on*. [F]
 b. Your country is not worth sacrificing your life *for*. [H]
- F) RC には受動態にならない動詞も生起するが, RG には生起しない。
- (22) a. *A degree needs *having*.
 b. *She needs *marrying* (by one of those doctors).
- (23) a. A degree is worth *having*.
 b. She is worth *marrying*. [H]
- G) RC では, 補部に埋め込まれた節の中に空目的語が生ずるが, 他の構文では不可能である。即ち, RC のみ下接の条件を破ることができる。
- (24) a. *This book deserves some persuading (of) the students to discuss over beer.
 b. *The paper needs telling him to rewrite again. [Hr]
- (25) a. This problem is worth persuading some students to work *on*. [C]
 b. The place is worth advising your friend to visit. [Hr]
- H) 寄生的空所は, RC にのみ可能である。
- (26) *These laws need/could use reinterpreting/reintepretation after revising. [S]
 (27) *This problem deserves some thinking about without losing any sleep over. [C]

(28) a. This problem is worth working on without losing any sleep over. [C]

b. This article is worth filing even without reading. [F]

I) 補部の主語を叙述する付加詞が生ずるのは, RG と RC だけである。

(29) a. * This report will be susceptible to (John's) revision/misinterpretation / vicious attack *drunk*.

b. ? *Crazy stories are worth discussion *drunk*. [S]

(30) These frivolous charges don't deserve / require investigating *sober*. [S]

(31) Crazy stories are worth discussing *drunk*. [S]

J) 主節に虚辞の *it* を許すのは, RC だけである。

(32) * *It* deserves careful analysis of this proposal.

(33) * *It* merits some working on this idea. [C]

(34) *It* is worth looking at Picasso's later paintings. [C]

以上で明らかのように, RD と RC とはほぼ反対の特性を示すのに対して, RG は中間的な性質を示している。言い換えれば, RD は明確に名詞句性を, RC は明確に動詞句性(或は節性)を示すのに対して, RG はその中間的な特性を示すという, いわゆる動名詞構文一般についてしばしば指摘されていることがここにもはっきり見られる。

次に, このような特性を説明すべく提案された分析について, 各々空目的語は何か, 空主語は何かという観点から検討し直す。特性がはっきりしている RC, RD の分析を先に検討し, 問題点を明確にした上で, 続いて RG の分析を検討するが, ここでは従来の RG のとらえ方を批判して代案を提示する。

3. RC の分析

RC を一番明確に他の構文と区別している特徴は, 複数の境界を越えて埋め込み文に生起可能だということ (G) と, 寄生的空所の存在 (H) である。これはいわゆる *wh* 構文の特徴であり, 従って, RC の空目的語は変項であるということも多く分析が一致している。この点で, RC は *tough* 構文ときわめて類似しており, 現在の GB 理論で一般的に受け入れられている *tough* 構文に対する分析が, RC にも提案されている⁶⁾。

(35) This issue is worth [wh-O_i [PRO considering e_i]]

consider の目的語の空所 *e* は, 空演算子 *O* によって束縛される変項であるということになる。RC は不定詞と同じように節構造をなしていると考えられ, (E)-(H) はその当然の帰結である。

(35)の構造を仮定すれば、RCの主語は当然 PRO であり、補部に伴う付加詞をコントロールする。この事実は(31)によって示される。

しかし、RC と *tough* 構文とが必ずしも全ての点で一致しているわけではない⁷⁾。例えば、*tough* 構文では形容詞が補部として *for* 句を取り、これが前置されることがあるが、*worth* はそのような句を補部として取ることはできない。

(36) a. This book is easy *for John* to read.

b. *For John*, this book is easy to read.

(37) This book is worth **for John* / **John* reading carefully.

また *worth* は、RC 以外の構文、即ち RD や RG も取ることができるのに対して、*tough* 類の形容詞にはそのようなことはない。Akiyama は、このような *worth* の補部の多様性を説明するため、*worth* 構文が *tough* 構文からなんらかの影響を受けながら拡張的に発達したものと考えている。しかし、*tough* 構文そのものも英語の構文の中ではかなり特異なものである。それは、上記の分析にみられるように、補部に空演算子が出てくるという点である。通常空演算子が関与する構文(目的節や寄生的空所を含む節など)は、語彙的に支配されたものではない。なぜ特定の形容詞(*tough* 類)及び *worth* の補部には空演算子が現われるのか。この点は次稿の検討課題としたい。

4. RD の分析

4.1. RD の空目的語については、大きく言って、統語的な空要素と考えるか、統語的なものではなく語彙的な θ 格子(θ -grid)から含意されるものとみなすかの2つの考え方がある。前者は例えば Clark (1985) の分析で、Clark は RD を基本的には RG と同様に扱い、目的語の PRO が前置されて主節の主語によってコントロールを受ける構文と考えている。即ち、(38a)から(38b)が派生するということになる。

(38) a. [_{NP}the baby] [_{VP}[_vneeds] [_{NP}some attention PRO]]

b. [_{NP}the baby] [_{VP}[_vneeds] [_{NP}PRO_i some attention t_i]]

このような前置を許すのは、 θ_r という特別の θ -role を付与された補部である。この特性によって、補部の主語の θ -role = 「動作主」の脱主題化(dethematization)が可能になり、主語の位置が空になる為に前置を引き起こすというのである。この分析は、次節で検討する RG の分析と同様、RD を基本的には受動構文とみなしていることになる。そして RD が前置詞残留(preposition stranding)を許さないのは、接尾辞が ING ではないため、前置詞句への θ -role の

付与が阻止されるからであると Clark は説明する。このような派生名詞句内における前置された PRO のコントロールという考え方には、Williams (1985) や Safir (1987) らの反論がある。以下、主として Safir を中心にその論点を見てみよう。

第一に、Clark は、RD においても RG と同様に属格主語が生起しないのが普通であると考えている。

(39) *This scoundrel deserves *the jury's* prompt conviction. [C]

しかし、これには多数の反例がある (A)。むしろ Safir が指摘するように、RD は属格主語を許すが、ある意味的な制約により阻止される場合もある ((10) 及び (39) の例) と考えるべきであろう。また RD では属格の副詞的要素も名詞の前に生起可能である (C)。いずれの場合も、目的語 PRO の移動先である指定部が埋まっていることになり、PRO の前置は阻止されてしまうはずである。

第二に、RD では、主節の主語と同一指示の空目的語が複数の名詞句に生起可能であり、必ずしも局地的な関係に限定されない。Roeper (1986) は、これを 'recursive linking' と呼んでいるが、一般に統語的なコントロールは複数の名詞句に対してかかるものではない。

(40) a. This proposal deserves reconsideration for resubmission

b. *This proposal deserves reconsidering for resubmitting

(41) a. These laws need/could use reinterpretation after revision.

b. *These law need/could use reinterpreting after revising

(42) John sought protection from attack. [R]

第三に、多くの名詞句において、目的語が前置されて属格形で現われることは許されない。Anderson (1979) の 'Affectedness constraint' によれば、派生名詞の意味する行為によって目的語がなんらかの影響を受ける場合には、属格形の目的語が生起するが、そうない場合には属格形の目的語をもつ派生名詞句は非文である。(43)において、*destroy* は目的語に影響を及ぼす (affect) 動詞であるが、*criticize* はそうではないと考えられる。

(43) a. The city's destruction took a long time.

b. *The proposal's criticism took a long time. [S]

従って、次の RD においても目的語の前置は許されないはずである。

(44) This reports needs criticism.

このような理由により、Safir は、RD の空目的語は統語的な PRO ではなく、統語構造には投射されない語彙構造にのみ記載されるべき θ -role であるとしている。その根拠としては、RD では主語を叙述する形容詞付加詞が現われないこと (I) が挙げられる。もし統語的な目的

語があれば、たとえ主語が音形をもたなくても、付加的に形容詞が生起するのは可能である(45a)。従って(45b)の例文は、RDには目的語が統語的に存在しないことを示している。

- (45) a. Discussion of the issue *drunk* did not clarify matters.
 b. *Crazy stories are worth discussion *drunk*. [S]

Safir は、RD の空目的語と主節の主語との間に次のような語彙的な意味関係を規定している⁸⁾。

(46) Receiving Patient Coconstrual (RPC)

Whenever a receiving patient is selected by some predicate P, then a DN complement which describes the activity that the receiving patient is related to will be understood as an activity that the receiving patient is a nonvolitional participant in.

即ち、被動作主がある種の述語の θ -roleとして選ばれた場合、その被動作主が関わる行為を述べる派生名詞句補部は、その被動作主が意志をもたずに関わるような行為として解釈される。

RPCによれば、次のような空所をもたない派生名詞句もRDと全く同じように解釈することができる。これは、RGには許されないことである。

- (47) a. Rex received suspension of his privileges.
 b. *These proposals merit reading their titles. [S]

(47a)が可能なのは、*suspension of his privileges*を、*recieve*の受け手 *Rex*が自らの意志とは無関係に関わりをもっている行為として解することができるからである。もし、*his*の代わりに *Rex*とは別人の名詞がくれば、*Rex*が関わるような解釈は成り立たず非文となる。

- (48) *Rex received suspension of Bill's privileges. [S]

また、次のような例もRPCによってやはり、RDの延長として解釈を与えられることになる。

- (49) a. John was forced to undergo (the) amputation of his left arm. [R]
 b. His body will undergo the gradual destruction of his liver. [R]

それに対して Roeper は、RDの目的語と主節の主語との関係を、'thematic linking'というより構造に依存した規則によって扱おうとしている。ここでは、(47)や(49)の例は純粋にプラグマティックなものとしてRDとは区別し、この規則では扱わない。しかし、RDの空目的語が統語的には投射されない語彙構造における要素であるという点で、両者は一致しており、本稿でもその説を支持する。

4.2. 次に RD の空の主語についてはどうであろうか。Clark が脱主題化 (dethematize) していると考えのに対して、Safir も Roeper もどちらも RD の主語は統語的に外部項として存在していると考えている⁹⁾。

一般に、統語的な空要素の存在を示す事象として証拠に挙げられるものの1つに、コントロールの現象がある。Jaeggli (1986) はコントロールに2種類のを区別して、これを Argument control (以下 AC) と Thematic control (以下 TC) と呼んでいる。前者は、構造的に c-command 関係を必要とし、受動文の主語のコントロールも可能であるのに対し、後者は、その反対の性質をもつ。この観点からみると、いわゆる Implicit argument (IMP) によるコントロールは、TC であって AC ではない。Jaeggli によれば、目的を表わす不定詞節 (rationale clause) は、IMP にコントロールされるので TC であるという。

(50) The price was decreased [PRO to help the poor]. [J]

しかし、派生名詞句の中の目的不定詞節は、IMP によってコントロールされず、受動文の主語のコントロールが可能なことから、AC とみなしている。

(51) a. the destruction of the city to prove a point

b. *the city's destruction (by the army) to prove a point

(52) The attempt to be introduced to the king failed. [J]

この議論に従えば、RD が目的不定詞節を伴うことができれば、RD の主語は IMP ではないということになる。

次のような文は可能である¹⁰⁾。

(53) a. The building needs/deserves reconstruction to preserve the atmosphere of the street.

b. These abstract paintings need/require careful scrutiny to separate the genuine from the forgeries.

(53ab) において、不定詞節の主語は各々 *reconstruction* 及び *scrutiny* の主語であると考えられる。従って、この主語は IMP ではなく、統語的に顕在化した PRO ということになる。しかし、文中にコントローラーは存在せず、意味上 PROarb と考えるのが適当であろう。

一般に派生名詞句の主語がコントロールされるかどうかについて、Roeper は次の2つの文の読みの違いに注目して、名詞句内の PRO の存在を主張している。

(54) a. John enjoyed falls from the airplane.

b. John enjoyed the falls from the airplane. [R]

冠詞がない場合には、falls の主語は必ず John にコントロールされるのに対して、冠詞がある

場合にはコントロールされてもされなくてもよい。従って冠詞がない場合には、そこに必ず PRO かあると考える。IMP は一般的にはコントロールを受けないと言われているので、このような例は PRO 分析を支持することになるという。また Roeper は、(55a)と(55b)を比べ、不定詞にはコントロールの読みが与えられないのに対して、名詞句はコントロールの読みが可能だとしている。

(55) a. John bought a copy to be reviewed/to be examined.

b. John bought a copy for review/for examination.

これは、(55a)には IMP があるのに対して、(55b)には PRO があるからだという。これらは直接に RD の例ではないが、名詞の前の位置の PRO を擁護する証拠といえよう。

以上の事実を総合して考えてみると、派生名詞句の主語即ちここでは RD の主語は、統語的な要素であり、一応 PRO とみなすことができる。しかし、この PRO は、後に指摘するように照応形としての PRO ではなく、代名詞形としての PRO である。つまり先行詞を自由に選ぶことのできる PROarb であると考えられる¹¹⁾。

5. RG の分析

5.1. RG に対してこれまで提案されたほとんどの分析は、この構文を一種の受動構文としてとらえるという点で一致している。(cf. Hantson, Clark, Safir, Harada, Ohna)例えば Clark は、(56a)から(56b)が生じるという分析を提案している。

(56) a. John needs a good talking to PRO

b. John needs [RRO_i a good talking to t_i]

主節の動詞(ここでは *need*)はある意味特徴をもつことによって、補文に特殊な ING を取ることが出来る。この ING は、受動文の *en* と同じように主語の脱主題化を可能にする特性 (θr)をもつ。主語が名詞の前に属格形で生起することが決してない(A)のは、 θ -role が脱主題化されているからだという。目的語の PRO は、本来の位置では統率されてしまうので前置され、あとに NP の痕跡 *t* が残る。前置された PRO は、主節の主語によりコントロールされる。この説は、以下の3つの主張を含んでいることになる。

①RG の空目的語は PRO である。

②PRO は前置される。

③RG の ING は普通の ING と異なり、受動的接辞である。

確かに、RG をいわゆる受動構文と平行にとらえることによって、いくつかの受動文との共

通性をうまく説明することができる。例えば、前置詞残留が許される (D) のは、Clark に従えば、ING が動詞の θ -role を前置詞句に付与することを阻止しない、即ち受動文における動詞と前置詞との再分析と同様の過程が、動名詞の場合にも起こるとするのである。また、埋め込み文からの取り出し (G) や寄生的空所 (H) が許されないのは、一般の NP 移動と共通である。(I) や (J) の特性もいずれも受動文と共有している。

しかし、このような特性をもつことが、即動名詞そのものが受身の動名詞であることを意味するわけではない。本稿では、①のみ認め、②及び③は認めないという立場を取る。②を認めないということは、統率される PRO を認め、目的語をコントロールする規則の存在を主張することである。これは、Bouchard (1984) の説を支持することになる¹²⁾。

Bouchard は、照応形としての PRO と代名詞形としての PRO を区別している。前者は、先行詞との照応が義務的であり、局地的である。従って、先行詞は唯一のものに定められ、ある構造的な制約を受ける。この PRO は統率されるが、格を付与されてはならない。これは、語彙化される名詞は必ず格・数等の特性を付与されなければならないのに対し、空要素は格付与をされてはならないという、彼の 'Principle of Lexicalization' の要請による。例えば、次のようなものは照応形としての PRO の例である。

- (57) a. John tried [_SPRO to leave]
 b. John like [_{NP}PRO [_{VP}reading books]]

一方、代名詞としての PRO はちょうど反対の性質をもつ。先行詞を義務的にもつ必要はなく、先行詞となるべきものが唯一のものとして構造的に規定されない。

- (58) a. John knows [_Sshow [_SPRO to behave himself/oneself]]
 b. John shouted [_SPRO to arrest Bill]
 c. [_S[_SPRO to finish the work on time]] is important for me. [B]

(58a) (58c) では、PRO は各々 *John* や *me* にコントロールされてもよいし、恣意的な他の者を指してもよい、即ち PROarb である。

本稿では、RG の空目的語は統率はされているが、ING によって格付与が阻止されていると考える。これは Bouchard の照応形としての PRO の条件を満たし、PRO は前置されないそのままの位置でコントロールが可能になる。RG に属格主語が生じないのは、指定主語条件によって目的語の PRO のコントロールが阻止されてしまうからである。

Clark や Safir のように動名詞句内で目的語が前置されると考えないのは、次のような理由からである。顕在化した目的語が属格形で ING 形の前に生起する構文は、歴史上のある時期以降ほとんど現われなくなっている。次の表現は現代英語ではおかしい。

- (59) a. *the king's murdering (=the murdering of the king)
 b. *these ideas' working on (=working on these ideas)

Visser (1972§1105-1106)によれば、代名詞以外の名詞句がこの形で現われる例は、OE 期以後きわめて少ないという。しかし、代名詞の属格形は、比較的最近までつかわれていたようである。しかも興味深いのは、現代英語になるにしたがって、いわゆる動名詞一語ではなく、不変化詞を伴ったりその他の VP 要素を伴った例が多く出ていることである。

- (60) a. They were constant even to *their* burning. (1604)
 b. Excuse *his* throwing into the water. (1598)
 c. Never was any thing so unpleasant as it was to me to wear such cloaths at *their* first putting on. (1719)
 d. people who were dissatisfied with *their* own bringing up. (1893)

これは、動名詞が次第に名詞性から動詞性を強めていく過渡期的な性格を示し、動名詞句内の主語がまだ義務的に投射される必要がなかったことを示している。前置が代名詞に限られているということは、名詞句の主語の位置ではなく、DET の位置に直接に前置されたとも考えられる。この位置では構造的な格は与えられず(従って語彙的な名詞句は生起しないが)、この時期の名詞句内の代名詞はデフォルト値として属格性をもっていたと考えておく¹³⁾。このような前置は、受動文における主語の脱主題化によるものとは全く性質を異にする。

5.2. 動名詞構文が動詞性を獲得したということは、今まで随意的であった主語が、統語的に必ず投射されなければいけなくなったことを意味する。空主語は必ず PRO として主語の位置に生起しなければならない。この PRO は、不定詞節の PRO と同様に、構文によって照応形の PRO としてコントロールされる場合もあれば、代名詞として arb となる場合もある。RG では、局地的な先行詞をもたず PROarb となると考えられる。

一方、動名詞の目的語は格を付与されなければならないが、名詞接辞 ING には本来格付与能力はない。そこで、格付与能力のある前置詞 *of* が必要になるのである。

- (61) the singing of the songs

しかし、RG は *of* を伴うことはできない。

- (62) a. *This proposal mertis reconsidering of.
 b. *The room needs a thorough picking up of.

従って、RG の目的語の PRO は、統率はされるが格は付与されないというコントロールの条件を満たす。前置詞残留が可能なのは、ある種の再分析が動詞と前置詞にかかり動詞の格付与

能力が前置詞に移行するという Clark の説を一応前提にし、Clark とは反対に、その能力を ING が阻止し、この位置に PRO が生起できると考える。逆に、動詞に隣接しない前置詞句の場合 (E), 前置詞が目的語に格を付与するので、PRO の生起は許されない。

この分析では、RG は基本的には名詞的動名詞或は行為名詞 (Action nominal) であるとみなしており、その点では Clark や Ohna と同じであるが、RG を受動文とはみなしていないという点で他の分析とは異なっている。

ここでいくつかの問題点がすぐに浮かび上がる。第一の問題は、*marry* のような受身にならない動詞が RG に生起しない理由であるが、これはむしろ意味的な観点から阻止できるのではないかと思う。RG に生じる動詞は行為動詞であり、*marry* や *resemble* がその特徴をもたないと言えるのではないか。

第二の問題は、動詞句の要素を伴う RG つまり動詞句的 RG の存在をどの様に説明するか。恐らく、ここにはなんらかの拡張的過程が関与していると思われる¹⁴⁾。ここでは詳しくは論じないが、この動名詞構造が既に述べたように *of* の生起を許さないところに、動詞句要素の生起を容易にする一因があるのではないか。即ち、一方で既に独立に発達した動詞的動名詞が存在し、その ING 接辞は動詞の格付与能力をそのまま引き継ぐことのできる動詞的接辞になっていると考えられるので、目的語はそれだけで生起し、動詞句内の要素を自由に伴う。RG は本来名詞的構造であるが、*of* が生起しないことから、一般の動名詞構造の影響を受けて、動詞句の要素を拡張的に伴うことが可能になると考えてみたらどうだろう。

第三の問題は、Safir が指摘している次の a-b の文法性の差をどのように説明するかということである。

(63) a. The men didn't think this narc would be worth talking to about each other.

b. *The men didn't think this narc would be worth a thorough talking to about each other. [S]

もしどちらにも PROarb が存在すると考えると、(63b) の *each other* が説明できない。従って、RG の PROarb が RC の PROarb と同じ統語的資格をもっているのかどうか問われることになるし、冠詞との共存関係も問題になろう。

第四の問題は、RG と共起する *by* 句 (B) をどの様に説明するかということである。

(64) a. The point needs stressing *by any linguist*.

b. That idea doesn't deserve any talking about *by serious scholars*.

主題の脱主語化を仮定する分析では、これを受動文の *by* 句と同じに扱えるが、本分析では脱主語化は起こっていないと考えるので、PROarb と *by* 句を結びつけるなんらかの仕組みが必

要である。この点の検討は別稿にゆずるが、次の二点を指摘しておきたい。第一に、RG が *by* 句を伴って現われる例は、実際には極めて少なく、*by* 句を伴う受動文に比べて、はるかに有標性が高いように思われる。第二に、RG の *by* 句に生じる名詞句は、特定の人物を指すことはまれである。(14)の *by* 句はいずれも、総称的意味合いをもつ名詞句である。この点に RG の本質に迫る鍵があるのではないかと考えている。

6. 結 び

以上、RC, RD, RG の 3 種類の Retroactive 構文についてその特性と構造を見てきたが、各々の空要素にしぼってまとめてみると、次のようになる。

| | 主語 | 目的語 |
|----|----------|-------------------------|
| RD | (PROarb) | 語彙構造の要素 (thematic role) |
| RG | PROarb | PRO (照応形として) |
| RC | PROarb | 変項 (O 演算子の t) |

これは、この 3 種類の構文の相違が、空目的語の相違に帰することを示している¹⁵⁾。空要素の選択は、冒頭に述べたようなパラミターの選択が関与する部分であり、言語間で、または構造間で相対化される部分である。即ち言語間の相違、或は言語の構造間の相違が、パラミターの値の選択によって生じると考えられている。子供は資料に即して空要素が何であるかという判断を下すことになるが、上記のように、同じ意味機能を担う平行な構造を仮定することによって、構文間の揺れの問題や歴史的な変化の問題を、空要素の値の設定の問題としてとらえ直すことができるのではないか¹⁶⁾。

注

1. Chomsky (1986) p.8
2. 'retroactive' という用語は、本来 Jespersen が不定詞構文について用いたものであるが、Hantson (1984) は、(8c) のような動詞的動名詞構文についても、形は能動形だが意味は受動的であるということで、retroactive gerund という名称を用いている。本稿では、(8a-d) が共有している特性に注目して、すべてを Retroactive 構文とよぶことにする。
3. 例文は、ほとんどが過去の研究論文からのものであり、出典を [] に頭文字を入れて示す。REFER-

英語の RETROACTIVE 構文について

ENCES 参照.

4. Hatori (1980) では、これを下接の条件に従わない削除規則と考えたが、本稿では、削除が関与しているとはみなさない。
5. Hatori 及び Ohna 参照
6. Fukuyasu (1984), Safir (1987) 等参照. また、冒頭の例文 (2) もこれと同様の構文である。
7. 詳しくは、Akiyama (1989) 参照.
8. Safir (1987) p.19
9. 統語的な外部項として、Roeper は PRO の存在を主張するのに対して、Safir は、内部項としての Implicit Argument (IMP) と区別して、統語的に投射されるべき外部項の IMP を提案している。しかし、この IMP が統語構造のどこに位置づけられるのかは明確ではない。
10. 例文のチェックに協力して頂いた F.J.Bosha 氏と L.L.Hanson 氏に感謝する。
11. Safir の外部項としての IMP もこれと同じ線に沿った考え方と思われる。
12. この構文に対して、主語が直接に目的語の PRO をコントロールするという考え方は、Hatori (1980) で示されている。統率される PRO の可能性は、Koster (1986) でも示され、Clark 自身も RG に対する別の分析の可能性として取り上げている。
13. 次の時期には、属格形は主語(構造的な格)に限定されるようになり、ING 形の前に生ずる主語以外の代名詞は、対格形で生起するようになる。
14. Ohna (1989) 参照.
15. RG と RC との間には、ING 接辞が名詞接辞か動詞接辞かという相違もあるが、これは一般的な動名詞構造の発達の共通問題であり、Retroactive 構文に限らない。
16. 各々の構文を補部としてとる述語は、RD が最も多く *undergo* や *suffer* なども含まれるに対し、RG は *need* タイプや *deserve* タイプの動詞に限定され、RC はほぼ *worth* に限られるという事実は、この構文の基本が RD であることを示しており、Akiyama の主張を支持することになる。

REFERENCES

- Akiyama, Y. 1989. A dynamic approach to the *worth* construction. Master thesis. Tokyo Gakugei University. [A]
- Bouchard, D. 1983. On the content of empty categories. Foris, Dordrecht. [B]
- Chomsky, N. 1986. Knowledge of language. Praeger.
- Clark, R. 1985. Boundaries and the treatment of control. Ph D dissertation, UCLA. [C]
- Fukuyasu, K. 1984. Worth 構文の特性について『英語学』27.41-58. [F]
- Hanson, A. 1984. Towards an analysis of retroactive gerunds. in W. de Geest and Y. Putseys (eds.), Sentential complementation. Foris, Dordrecht. [H]
- Harada, R. (原田龍二) 1988. 受身的動名詞句をとる述語動詞について『大妻女子大学文学部紀要第20号』
- Hatori, Y. 1980. A gerundive construction worth studying. Linguistics and Philology 1.1-25. [Hr]
- Jaeggli, O.A. 1986. Passive. LI 17.587-622. [J]
- Koster, J. 1987. Domains and dynasties: the radical autonomy of syntax. Foris, Dordrecht.
- Ohna, T. (大名力) 1989. need + 動名詞について『英語教育』9-10月
- Roeper, T. 1986. Implicit arguments, implicit roles, and subject/object asymmetry in morphological

rules. ms. UMass. [R]

Safir, K. 1987. Evaluative predicates and the representation of implicit arguments. Rutgers University. [S]

Visser, F. Th. 1972. An historical syntax of the English language. II. Leiden: E.J.Brill.

Williams, E. 1985. PRO and subject of NP. NLLT 3.297–315.